

友だち

1

しまらないキャラどうし だったんだ

プッププップ……カンボジアの少数民族の村に息づくゴング文化。

言葉のように雄弁でなくても、振動だけは確かに伝わる。

そんな音をめぐって思う「友だち」ということ。

井上 航 いのうえ こう / 国立民族学博物館外来研究員

音は伝える

カンボジアの首都プノンペンから車で8時間ほど揺られると、北東部のラタナキリ州だ。なだらかな稜線がえんえんつらなるこのあたりの山々に、広く散らばって住んでいるいくつかの少数民族のなかにクルンの人々があり、その一つの村で私は何年か調査を続けている。

クルンの人々は、病気や畑の不作などを、多様な生物や事物の霊魂どうしのせめぎ合いによるものとみている。いわゆるアニミズムだが、これと音楽の関係に私は興味がある。人々は山を切り拓いて焼畑をつくり、森に入って獣を狩る。そこは多種多様な動物・植物がひしめき自分の食いぶちを遠慮なく主張する騒がしい音の世界だ。聞きなれない不気味な音もあれば、正確に意味が察知できる音もある。何かの生の気配である音に意味を感じようとするのは人間も人間以外の動物なども

同じだ。万物が勝手に動いたりはびこったりする音がこちらに伝わるなら、こちらも音で伝えられることがある。豊作や病の治癒への願いは人間以外の何かへの願いとなり、儀礼のなかで音により表現される。

ゴングをもとめて

クルンの大掛かりな儀礼ではゴングが演奏される。マンホールのふたぐらいのものからパン皿ぐらいのものまであり、サイズによる音高の違いを利用してメロディを打ち出す。使う枚数はさまざまだが、私が入った村では5枚での演奏が多い。一人1枚、それぞれが一音をうけもつ。私も打ちたくて、演奏のある儀礼によく出かけた。決まったメンバーの楽団があるわけではなく、その場に居合わせた人たちのなかで打ってみようという人が自由に参加する(なぜか男性がほとんど)。「弟子入り」のような習い方はなく、毎回全員が「飛び入り」だ。最初は私のようなよそ者でも大丈夫かと不安だったが、それなりに周囲と親しくしていれば参加OKだ。問題はどやって打てるよう

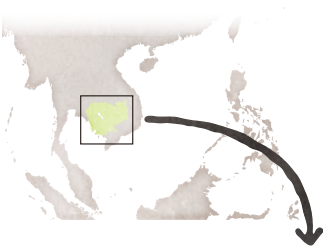
になるか。飛び入りの場数を踏みながら少しずつ教わるしかない。となると、いつだれと一緒にゴングを打つことになるかわからないので、ふだんから大勢の人たちとなかよくしなくてはいけない。

私は、ある家に居候させてもらいながらできるだけ村のあちこちに顔を出すことにした。居候先の家族は畑に出る。畑仕事にも興味はあったが、足手まといだったのだろう、村に残るようやんわり諭されることが多かった。さて家の人が出ていった後に一人でどうなるでもない。毎日いきあたりばったり人にいるところを訪ねていく。どんな日も何かの儀礼で朝から壺酒を飲んでいる家が一軒か二軒あり、結局そこに誘われて酒を飲む。クルン語では「飲む」にあたる語が文脈により「儀礼」の意味をもつ。儀礼は飲み会でもある。「お前と同じ年のおれには孫が3人いるのに、お前はまだ結婚しないのか」「クルンの女をめとるのはどうだ?」こんな会話ばかりで酒を飲むのもしんどかったが、私は毎日村のあちこちを歩いた。

ゴング演奏のある儀礼はそれほど多くないといえ、村にずっといれば機会をとらえることができる。プッププッププッププップ……。これは現地のオノマトペで、牛や水牛を精霊に捧げる儀礼でのゴングの1パートを表している。木魚のようにひたすら等間隔の拍を打つだけ。実はテンポをキープする重要な役目だが、習い始めの私でもいちおう格好はつくので最初の頃はこればかりをやった。案の定リズムはずれる。だめだだめだ、替われ! そんなとき言葉少なに教えてくれたのがグルモイチ(仮名)だった。

投げ上げ名人

だれが演奏してもよいので、5人合奏にしても1日で10人とか20人が入れ替わりながら音をつないでいく。そのなかには常連というべき叩き手も何人かいて、グルモイチもその一人だった。彼は一人でやってくる。いつも飲んでいてやせた体をフラフラさせ、伏し目がちにたまに笑う。表情



壺酒。砕けた米粒と^{もみから}籾殻を蒸したものを発酵させている。筆者撮影、2013年。





ビールを飲む筆者(右)と村の知人。
筆者知人撮影、2015年。



ゴングを演奏する村の人々。水牛を精霊に捧げる儀式にて。筆者撮影、2015年。



村の人々とゴング演奏に参加する筆者(右)。水牛を精霊に捧げる儀式にて。筆者知人撮影、2015年。

儀式で壺酒を飲む村の人々。徹夜の精霊憑依儀式の翌朝で眠たげな人もちらほら。筆者撮影、2015年。



言葉は雄弁なほうでない。ゴングの常連でもあるが、それ以上に儀式＝飲み会の常連だ。酔ってすぐそこで寝てしまい、いつのまにかまた一人で立ち去ってしまうから、私は彼をよく見かけるのにあまり会話をしたことがなかった。ゴング奏者としての彼は、酔っ払ってちゃんと打たないときも多いためかとくに評価されていない。でも、熱心に打っているときの彼は、粘っこい弾力ある音を響かせるので、私は彼に聞き入ってしまうことがよくあった。

ブップブップブップブップ……。ああ、彼が打つと周りの奏者も生き生きしてくる。彼が教えてくれたのは、ゴングをわずかに投げ上げて打つやり方だった。直径30cm ちょっとのゴングの裏側の広い面の中央に左手のひらをぴったりつけ、投げ上げてわずかに宙に浮かせる。その瞬間ゴングの表のコブを右手のバチが打つ。ミュートなしの音が広がった次の瞬間には左手のひらがゴングを受け止めて音がやむ。速いテンポでこれを繰り返すのは大変だが、リアルな放物線のリズムとでも言おうか、独特の心地よい弾力が音にこもる。手本を示して彼は、「こんなんよ、へへへ」と一瞬だけ私の目を見てくれた。その打ち方が良いのはどうやら衆知のことだったが、皆は腕が疲れるからやらないようだった。ともあれ背中を押された私はブップ以外のゴングのパートもだんだん覚えて1年ぐらいで常連の末席に連なるようになった。

4人の肩身の狭い男たち

ところで、私は村の一般男女からからかわれることがある。飲み席でもたいたつぷりに「この村で結婚してない男、だれ？」ときかれ、私が「○○、△△、グルモイチ、私」と、私(そう、それに彼も)を含む4人の名を挙げ、予定調和の笑

いがおきるというものだ。名前も暮らしも互いに知れ渡っている300人の村の内輪の下世話さだ。笑われるのが私一人ならまだよいが、ところ変われば立派な「セクハラ」の会話に加担してしまうのは後ろめたい。結婚しなくて何が悪い。ひとの人格をそれに結びつけるな。そう心で思いながら堂々と4人の名を挙げるのだが、笑われているところに気張っても手ごたえがない。うーん、悩ましい……。

いや、本題は違うのだ。あるとき私は気づいた。その4人が皆ゴングの常連であることに。偶然だけれど、全くそうとも思われない。事情はそれぞれだが4人も、畑仕事をしない・できない(ゆえにヒマである)、いくぶんコミュニケーションが苦手、でも孤独はつらいので村をさまよう、行く先々で酒を飲んでしまう、ますますしまらないキャラに見られる(これらとの因果関係は知らないが結婚もしてない……)。私は参与観察の四文字を心で唱えながら村をくまなく歩いていたのだが、周りには全然違った姿に映っていたのか。

でも、いたたまれなくならないことに、そこにゴングがあったということなのだ。○○、△△、そしてグルモイチに私は、似た者どうし、図らずもゴングに引き寄せられていたのかもしれない。



ゴング5枚による演奏。筆者撮影、2012年。

ゴングは周りの皆とも一体感が生まれるし、何かに打ちこめている充実感を味わえる数少ない機会なのだ。事情は屈折しているけど、これも一種の音楽の包容力なのか。

友だちへ

グルモイチは、おのれの肉体をフルに巻きこみ、重さと音と筋肉感覚だけで頭がからっぽになってしまうあの投げ上げに身を任せたくてやっていると思う。なんだかんだの現実に「やりすでせ、やりすでせ」と思って叩いてるんじゃないか。きみの音がそう聞こえるのは、私もそうだからだろうか。いまだに言葉は少ないけれど、そんなふうに思えるきみを「友だち」と思っていていいかな？ **FP**